

「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」 森美術館同時開催プログラムのご案内

会期：2017年7月5日(水)－10月23日(月) 会場：森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って
順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション005:リサイクル&ビルド

出展作家：岩崎貴宏(1975年広島県生まれ、在住)

宇治野宗輝(1964年東京生まれ、在住)

宮本隆司(1947年東京生まれ、在住)

企画：近藤健一(森美術館キュレーター)

戦後日本は、老朽化した建築や施設を壊し、最新技術を用いたものに置き換える、「スクラップ・アンド・ビルド」という方法で、発展を遂げてきました。10年単位という短いサイクルで都市を変化させるこの手法の裏には、技術信仰、経済優先、効率主義という「近代」的な思想がありますが、今日、その有効性は再検証されています。過去20年、建築のリノベーションが再注目されていることは、そのひとつの現われといえるでしょう。

本展は、今年のヴェネツィア・ビエンナーレに日本代表作家として参加している岩崎貴宏、今年8月開催の「ヨコハマトリエンナーレ2017」に参加の宇治野宗輝、2012年紫綬褒章を受章した宮本隆司という、近年注目を集める日本人作家3人の作品を通じて、都市とリサイクルの関係に焦点をあてます。

ベニア板と中古家電製品の組み合わせにより、架空の都市が表現された宇治野のサウンド・スカルプチュア《ヴァーティカル・プライウッド・シティ》(2011年)、タオルや衣服の糸によるミニチュアの建築物が構築された岩崎の立体作品《Out of Disorder》(2007年)、拾い集めたダンボールで作られたホームレスの家を主題とした宮本の連作写真「ダンボールの家」(1994-96年)。些細な日用品をリサイクルすることで作られたこれらの構造物は、カッコよさや時流、合理性からは外れたものかもしれませんが、独創性に溢れ、私たちが忘れてしまいがちなものを思い出させてくれることでしょう。



岩崎貴宏 《Out of Disorder》 2007年 パスタオル サイズ可変
撮影：木奥恵三



宇治野宗輝 《ヴァーティカル・プライウッド・シティ》 2011年
木、家電製品、ミクストメディア サイズ可変
展示風景：宇治野宗輝「TRANSCRIBED」、山本現代、2011年
撮影：木奥恵三



宮本隆司
《ダンボールの家——東京 1994》
1994年
ゼラチン・シルバー・プリント
51×61 cm

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報：瀧、成田

Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum Web: www.mori.art.museum
〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

MAM
SCREEN

MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりの
シングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン006：カミーユ・アンロ

企画：椿 玲子（森美術館アソシエイト・キュレーター）

助成：フランス大使館／انسティチュ・フランセ日本

カミーユ・アンロの制作手法は、映像、彫刻、ドローイング、インスタレーションなど多岐に渡っています。アンロは人類学、文学、博物学など幅広い分野からインスピレーションを受け、知識が記録される方法、さらには知識が様々な文化を通じて変容する様子について、ユニークな見解を示します。彼女がこのようなテーマを探究する背景には、「デジタル」の隆盛が、自然界から精神世界に至るまで、すべてのものと私たちの関係性を変貌させたことへの気付きがあるといえます。

本展では、アンロが2002年から2011年までに制作した短編映像9本を一挙に紹介、約50分のプログラムとして上映します。記憶、映画、文化的対話に関する前提自体に疑問を投げかけ、鑑賞者が世界を理解するための常識について再考するように仕向ける作品群は、私たちに新しいものの見方を提示してくれるでしょう。



（左）《ポリフィルス狂恋夢／夢における愛の戦い》
2011年 ビデオ 11分40秒

Production: Maharaja Films; With the support of Centre Pompidou, Musée national d'art moderne; Centre national des arts plastiques and the Mairie de Paris - Département de l'Art dans la ville
Courtesy: kamel mennour, Paris/London; Centre Pompidou, Paris
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 G0874

（右）《死にゆく生きた女》 2005年
ビデオアニメーション、フィルムにスクラッチ 6分15秒
Courtesy: kamel mennour, Paris/London
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 G0945

上映作品

1. 《ポリフィルス狂恋夢／夢における愛の戦い》	2011年	11分 40秒 *1	*1 制作：マハラジャ・フィルムズ、 助成：ボンビドゥー・センター国立近代美術 館、フランス国立造形芸術センター、パリ市 芸術発信局
2. 《メタウルフ》	2002年	2分 39秒 *2	*2 アニメーション、フィルムにスクラッチ、 音楽：オクテット
3. 《スコープ》	2005年	3分 8秒 *3	*3 サウンドトラック：ベンジャミン・モランド
4. 《アートの自然史》	2009年	6分 49秒	*4 アニメーション、フィルムにスクラッチ
5. 《ランスキー》	2003年	3分 59秒 *2	*5 アニメーション、毛髪のコラージュ、 音楽：フロレンシア・ディ・コンシリオ
6. 《ウルフ・アイズ》	2008年	6分 26秒	*6 35ミリフィルムからデジタルベータカムに 変換
7. 《死にゆく生きた女》	2005年	6分 15秒 *4	上映作品1～9いずれも Courtesy: kamel mennour, Paris/London
8. 《勇気を出して、私の愛！》	2005年	3分 45秒 *5	
9. 《切られ／ずられ》	2010年	4分 7秒 *6	

※当プログラムは約50分で、下記の時間より上映を開始いたします。

10:00、11:00、12:00、13:00、14:00、15:00、16:00、17:00、18:00、19:00、20:00、21:00（火曜日 10:00、11:00、12:00、13:00、14:00、15:00、16:00）

※企画展・プログラム等実施のため、「MAMスクリーン」の上映のない時間帯があります。

詳細は、森美術館ウェブサイトをご覧ください。www.mori.art.museum

カミーユ・アンロ

1978年パリ生まれ、ニューヨーク在住。カミーユ・アンロは、映像作品《偉大なる疲労》で、第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2013年）で銀獅子賞を受賞したことで国際的に知られるようになりました。近年ではニューミュージアム（ニューヨーク、2014年）、フォンダツィオーネ・メモ（ローマ、2016年）、クンストハレ・ウィーン（ウィーン、2017年）での個展を始め、世界各地の展覧会に参加し、注目を集めています。さらに今年の秋にはパリのパレ・ド・トーキョー全館を使った大型個展を予定しています。

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報：瀧、成田

Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum Web: www.mori.art.museum

〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

MORI ART MUSEUM

MAM
RESEARCH

MAMリサーチは、アジアの現代美術を中心に特定の作家や動向に着目し、歴史的、社会的な文脈とともに考える資料展示です。

MAMリサーチ005：中国現代写真の現場——三影堂撮影芸術中心

企画：荒木夏実（森美術館キュレーター）、ウー・ホン（シカゴ大学美術史学部特別教授） 企画協力：三影堂撮影芸術中心

中国人と日本人の写真家ユニット榮榮&映里（ロンロン・アンド・インリ）は北京を拠点に2000年より共同制作を始め、生活に根ざした姿勢で、二人の家族が増えていく様子や、変わりゆく中国の風景、破壊される環境などに目を向けながら写真を撮り続けてきました。

2007年、榮榮&映里は、写真のための複合施設である「三影堂撮影芸術中心」を設立します。「三影堂」の名前は「道は一を生み、一は二を生み、二は三を生み、三は万物を生む」という老子の言葉に由来します。写真（影）が無数の可能性を生む場所になることを望んで作られたこのユニークな写真センターは、建築デザインをアーティストのアイ・ウェイウェイ（艾未未）が手がけ、ギャラリーや暗室、図書室等の設備を備えた画期的なものでした。2009年からは中国の若手写真家の発掘と育成を目的とした「三影堂撮影賞」を開始。その後も展覧会やレクチャー、ワークショップなど多様な活動を積極的に行っていました。2015年には福建省廈門（アモイ）市に三影堂の分館がオープンし、活動の場はさらに広がっています。

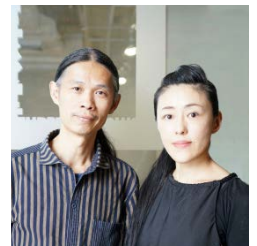
本展では、三影堂の10年を振り返り、その活動を紹介、また美術史家のウー・ホン（巫鴻）氏と協働し、中国現代写真史における三影堂の役割についても考察します。



三影堂で開催された米中芸術文化フォーラム
2011年

榮榮&映里（ロンロン・アンド・インリ）

榮榮（1968年中国の福建省生まれ、北京在住）と映里（1973年神奈川県生まれ、京都在住）は1999年に日本で出会い、映里が北京に渡って共同制作を始める。主な展覧会に「複眼：榮榮&映里作品2000-2010」（ヘーシャン美術館、深圳、中国、2012）、「榮榮&映里写真展 三生万物」（資生堂ギャラリー、2011）、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2012」（新潟、2012）、「写真のエッセー五つのエレメント」（東京都写真美術館、2013）、「LOVE展：アートにみる愛のかたち シャガールから草間彌生、初音ミクまで」（森美術館、2013）、「記憶の円環：榮榮&映里と袁廣鳴の映像表現」（水戸芸術館現代美術センター、2016）など。ソニー・ワールド・フォトグラフィー・アワード最優秀貢献賞受賞（2016）。



❓ 展覧会関連プログラム

■トークセッション「写真の現場から世界へ：三影堂と中国現代写真の歩み」 ※日英同時通訳付

写真を通して文化の国際交流に大きく貢献してきた三影堂の誕生までの道のりと活動について榮榮&映里が語ると共に、彼らを初期から見続けてきたウー・ホン氏が中国の現代写真の歴史と文化的背景について話します。さらに笠原美智子氏を交えて日本と中国の現代写真の状況などに触れながらディスカッションを行います。

出演：ウー・ホン（シカゴ大学美術史学部特別教授）、榮榮&映里（アーティスト）、笠原美智子（東京都写真美術館学芸課長）

モデレーター：荒木夏実（森美術館キュレーター） 日時：2017年7月29日（土）14:00-16:00 開場：13:30

会場：森美術館オーデトリウム 定員：80 料金：無料（要森美術館の展覧会チケット） お申し込み：森美術館ウェブサイト

*出演者は予告なく変更になる場合があります。予めご了承ください。

最新のプレス画像は、森美術館ウェブサイトのプレス画像ストックより申請、ダウンロードいただけます。

<https://mam-media.com/jp/press-img>

プログラムに関するお問い合わせ：森美術館 ラーニング

Tel: 03-6406-6101（月～金：11:00-17:00） Fax: 03-6406-9351 E-mail: mam-learning@mori.co.jp

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報：瀧、成田

Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum Web: www.mori.art.museum
〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

MORI ART MUSEUM